

魔法少女陵辱



「ほれ、早くチンポ舐めてくれよ、フエイトちゃん」
「だ、誰が…こんなモノ」
「そ、そうだよ…こんな汚らしいモノ、
胸で挟むだけでもソツとするのに…舐めるなんて…でも…でも…!!」

フエイトには本人も知らない内に、精液を欲しがる体質になる魔法を
かけられていた。理性では否定しても、今のフエイトは精液が
欲しくてたまらないのだ。今の状態も半強制的とはいえず、通常ならば
フエイトはハイスリすら拒否している筈なのだ。



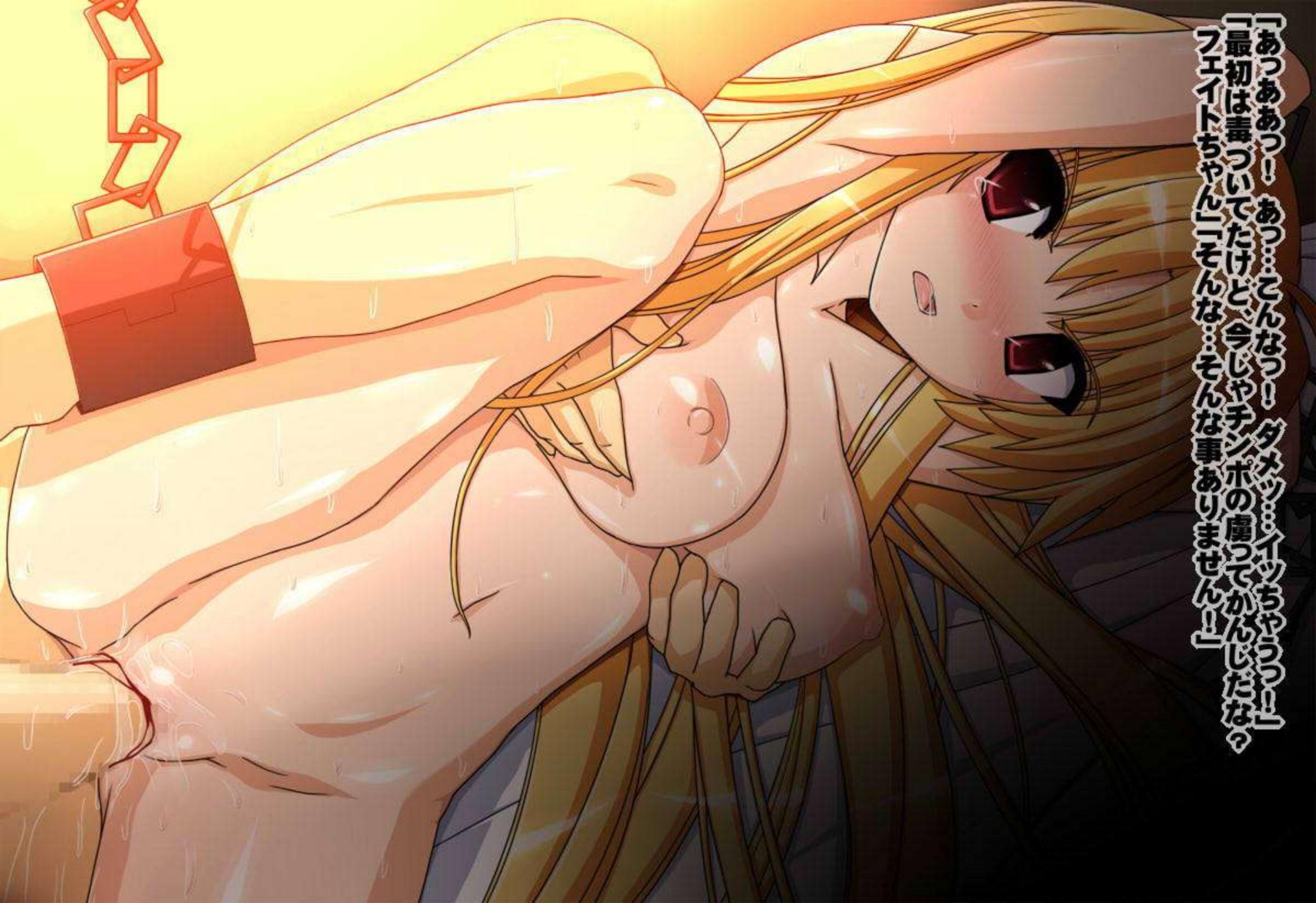
「擦るだけ、擦るだけだから……一応、少しだけは言う事を聞いておかないと仲間に迷惑がかかっちゃうから……」フエイトは自分に言い訳をする。その言い訳が持つ情けなさに気付かない。



「んっんっんっんっ……あっ……何か……出てきた」

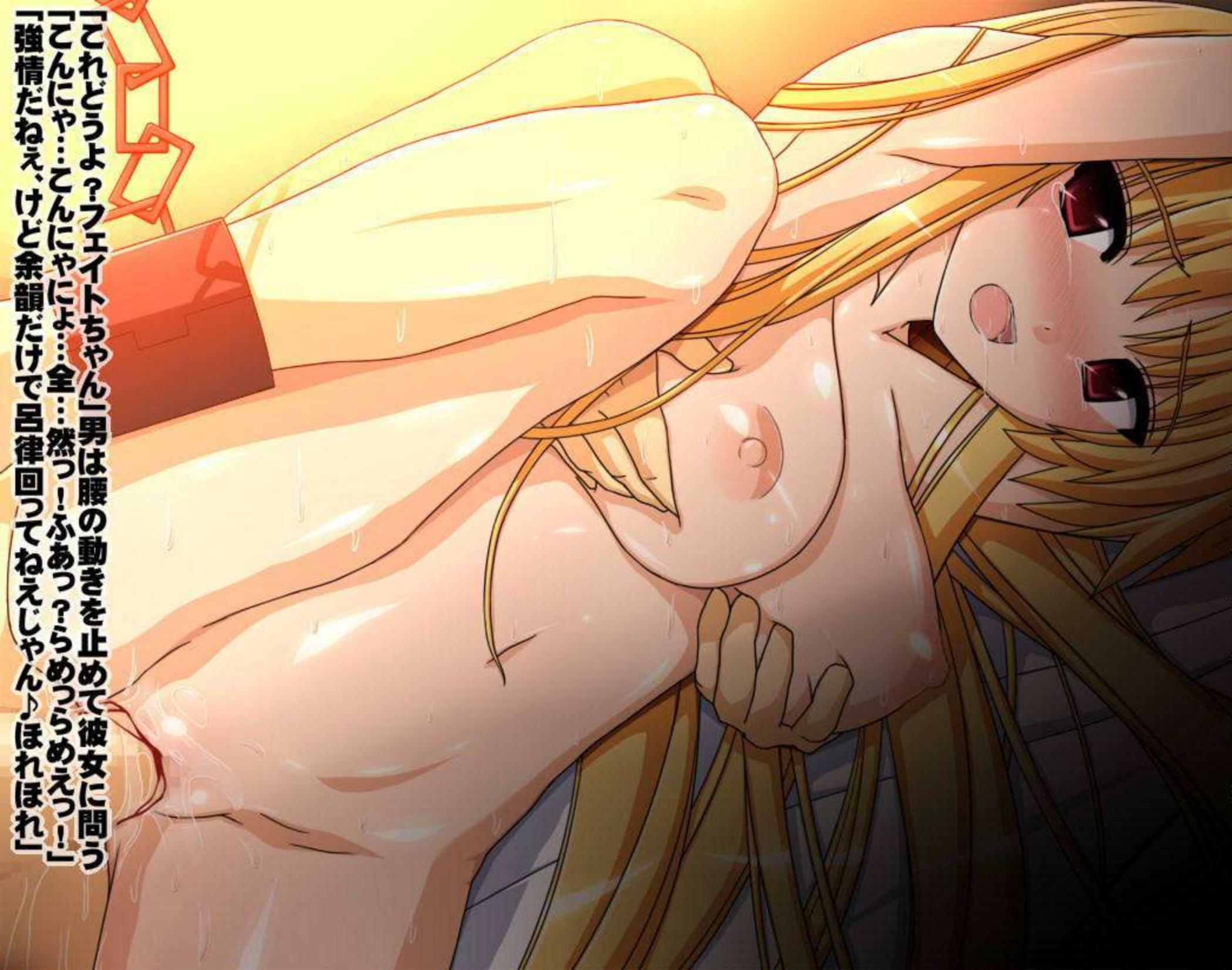
「やだ……この匂い嗅いでると……たまらなくな……る……」

先走り汁の匂いを嗅いで更に興奮したフエイトの手の動きが加速する



「あつあつ！ あつ…こんなつ！ ダメッ…イッちゃんっ！」
「最初は毒ついてたけど、今じゃチンポの腐つてかんじだな？
フエイトちゃん」そんな…そんな事ありません！」

「それじゃあ、これで……どうよっ!!」「ふあっ? あっあああっ!!」
男は普通の人間にはありえないスピードでフェイトを突き始めた。
魔法を使い運動能力を強化したのだ。通常ならば痛みを感じる程の
激しさだったか、今のフェイトには全て快感に変換されていた。
「あ・あ・あっ! ああああっああっ!! やめっやっやっやああっ!!」

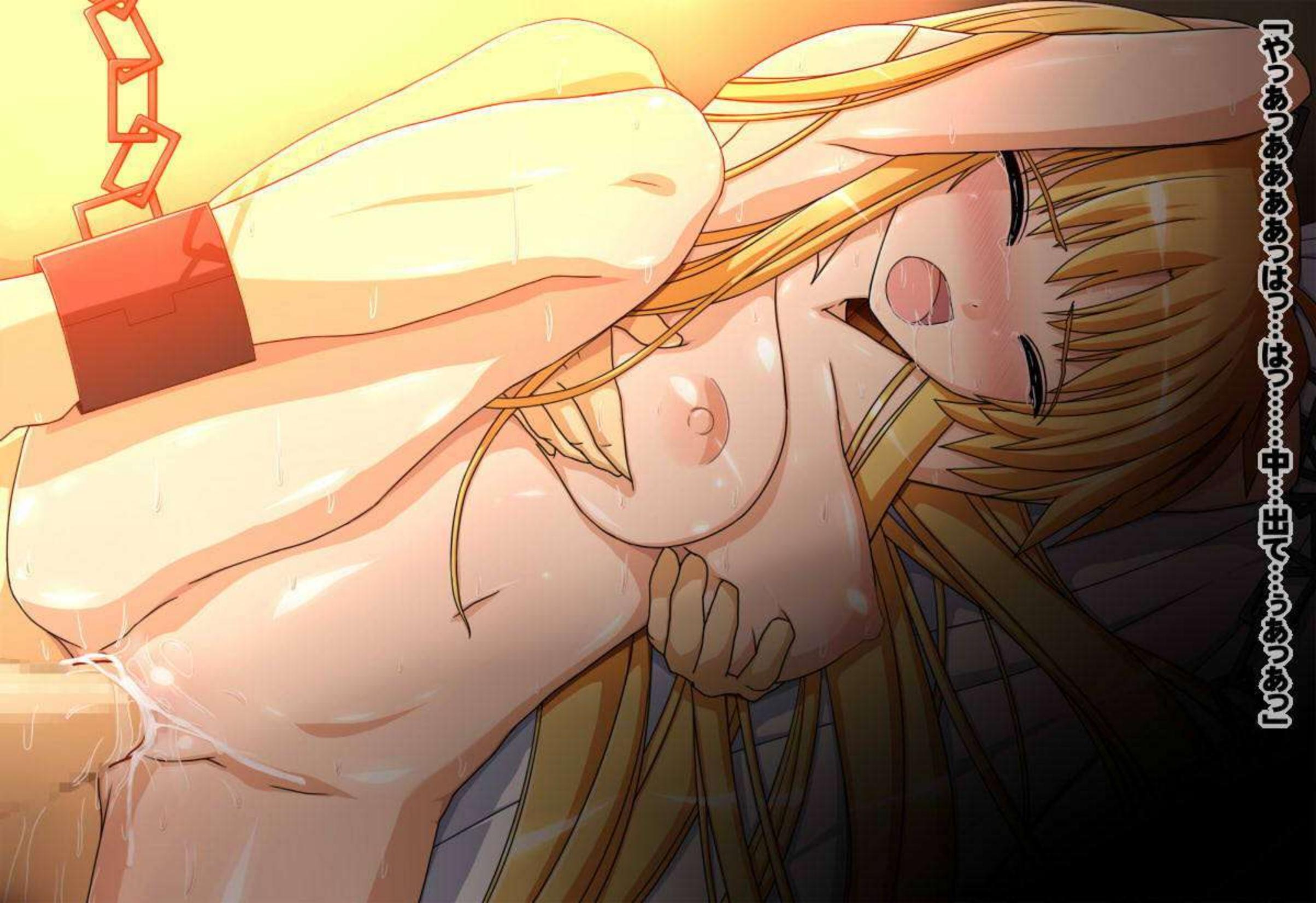


「これどうよ? フェイトちゃん」男は腰の動きを止めて彼女に問う
「こんなにや……こんなにやによ……全……然っ! ふあっ? ちめっちめえっ!!」
「強情だねえ、けど余韻だけで呂律回ってねえじゃん」ほれほれ」

「ふあつあつああああつーえうっ……なにやんで、また止めっ……」
「止めて欲しくなかったか？」「やつあうっ、ひがっ……違う……」
「途中で止められたくないって事はチンポが欲しいって事だろ？
まあいいよ、素直になるまでこれ続けるからな？」
「らめっ、そんなにやつ……あうあうっ！あつあつあああつー！」

「止めて……動いて……止め……ずに動かす」「はひやつーひやつあつ
あつあつあああああつー」「ほれほれ、気持ち良いんだろ？」
「気持ちいいっ、気持ち良いからっ！もうっやめてええっ！」
「言わされた感は否めないけど、言葉に出しただけでも一歩前進か
くくっ、ほれ、今から射精してやるからな」





「うんうんうん...」

「あつうあつう！ やめつ…やめつ…ひうつ！ やめ…なさいっ！」
「こんな腹して強情保てるってのはある種、感服って感じたがな…
俺はいつもの素直な方が好みだわ♪ いつもの魔法いっとく？」
「やだっ！ やめつ…やだ…やだやだやだやだあつ！」
「子供みたいに喚く程、嫌か？ ほーら…」
「やっあつあつ」



「あはっ♪ オチンチンいっぱいだあ♪ 今日もフエイトにいっぱい
精液ミルクくれるんだよね？」
「ははっ♪ いい表情しやがる、やっばこっちの方がいいな♪」
「んっんっ、あつあつ！ お腹突き上げられるの…イイよあ♪」

魔法を掛けられたフエイトは先程までとはまるで別人だった。半年以上の魔法使用の副作用で、フエイトは魔法を掛けられると精液が大好きな別人格に切り替わってしまおうようになっていたのだ。



「あつ何これ…、おっぱいから…ミルク出ちやつてる?」
「へー、もうそろそろ産まれるんじゃないの?よくわかんねーけど」
「ね、ねえ…子供が産まれた後もフエイトをかわいがってくれる?」
「当たり前前だろ?(先の事なんかわからねーつての)」



「あは♪嬉しいな…これからもいっっぱいっっぱいフヘイトに
オチンポミルクちようったいね…ね、出して、もう、フヘイトも…
イッちやいそっつだから…んっあっああっ」



「いっぱい…いっぱいだねっ」





「あつちよつやあー！ あつあつー！ (こんな…やつ我慢できんよ)」
「ほれほれっー！」「くあつあつあああああつー！ あつあつー！」「あつあつー！」「
「イツちやえつで」「ひやつあつあつあつあつー！ あつあつあつー！」「



「あ、もうやばい……く……」
「ちよつあかんよ、抜いでっ……抜いでっ……かっ……」



「あーあ、もしかして、はやてちゃんはイケなかった？」
「…あ、ちよ、そんな事より…中だし…すんなあ…」
「いいだろ、そんなん…これから何百回もやるっの」



「アంతら、こんな風に抵抗できない女鬪つて楽しいん？まあえええよ早く済ませてや」「あれ、はやてちゃん早くして欲しかったの？」「違つ、」済ませて」「つてのは…はあ、もう何でもええよ」「やだなあ、はやてちゃんのそういう態度、けどまあ今日の趣向ははやてちゃんも気に入るんじゃないかな」

「ちよっ、何…それ…おっぱいが！」
「魔法でちよっといじっただけだよ…あと…
できちよっただけだね♪」「ふえっえっ？」





「まだ…これで更に…昨日の魔法を」
「それ…やつ…あつ！あつああああつ！」
（あかんよ…これ、昨日と違って痛みがないから…快感が直接）
「やあつ！あ…あ…ああああつ！ ダメツあつあああつ！」



「…ふうっ…今日はイッてくれたみたいだね？これ続けてけば、
いつか、はやてちゃんも快樂の虜になつてくれるかもね」
「そ、そんな事ないっ！」「ま、やるだけやってみるさ」



「あつあつー！そこあかんっー！やあつあつ……えっ何で止ま……」
「いや、そろそろちゃんとはやてちゃんの口から聞きたいと
思っでさ、俺のチンポハメて欲しいって」
「そ、そんなんどうちでもええやろっつて……違っ……ハ、
ハメて欲しないに決まってるやろー！」

「ふーん、じゃ、このチンポ抜いちやっついていいんだ」
「やっえあつー！」ちよつとちよつと、抜こつとしてんだから
お尻押し付けてこないでよ♪」「そ、そないな事、言わんでも……
わかっ……とるやろっ！」





(駄目や、こんなん…男に許しを求めてるみたいな口調で…
もう半分以上、思惑通りになつとる。せやけど…これ
気持ち良すぎや…これで、チンポ抜かれたら、ウチ…もう)



「入れて……んー？何て？聞こえない」
「……っ……入れて……ください……ウチ、もう限界やかからっハメてっ！
「アンタのチンポいっぱい、ハメて欲しいんよー！」
「くっくっ……よく……できましたっ！」「来たっ♪あっあああああっ」

狭い室内、なのはが男に犯されている。

「おらっっ……このっっ……どうだっ！チンポたまらねえだろ！」
「……っっ……ん……ふ……ん……っっ……」

なのはの性感は魔法で高められ、男の肉棒が動くたびに
芯までとろけそうな快感がなのはの中から生まれてくる。



「これ、結構…ギリギリかも…けど…絶対に…負けるもんか!」
「なのはは必死に耐えていた。喘ぎ声を上げず、身じろぎ一つしない。
男を喜ばせるような事は何一つしたくなかった。——だが、

「いっせめいっせ…っ!」
「ビクッ! ビクッ!」
「男の射精と共になのはの体は下腹を痙攣させて、絶頂していきい。

「くそっ！」なのはの絶頂の様子に、何故か男は不満そうだった。彼女に使用した魔法は強力で男はどんな女も一発でオトしてきた。だが、なのはだけは何回犯してもモノにできないのだ。

彼女は絶頂後、すぐに反抗の意志を立ち上げ、こちらを睨む。

初めて犯した時から変わらな。変化がない。平行線。彼女の意志はこの魔法では折れない。

「…アプローチを変えるか」男は小さくつぶやいた。





「あ・あ・やあつ！ やめて、やめてえつ！ もう駄目だからっ！」
先日までとは違い、なのはは快感に抗う事が全くできなかつた。
淫らに喘ぎ、恨んでいたはずの男相手に懇願する始末——魔法で
男性化されたクリトリスのせいだ。

「女とはいえチンポ付いてるのは嫌だったんだが、こりゃあ中々……」
「お願い……ごめんなさい！ だめつだめつ！ うあつあつあああつ！」

ビュクツビュルツビュルルツルツ!

「あ・あ・あ・あああつあつ! あつ! あああああああつ!」
「さつきから射精しっぱなしじゃねえか……? てかこの匂い、
精液じゃなくて……チンポから母乳が出てんのか?」



なのはは混乱していた。膣の快感を我慢しようとするれば陰茎の快楽に襲われる。逆も同じだ。同時に対応する事ができない。男性的快楽と女性的快楽、通常、同時に起こり得ない未体験の現象に彼女の脳が混乱しているのだ。

母乳の他にも、魔法はなのはの体に様々な影響を及ぼしている。その一つが脳内麻薬の過剰分泌——脳内で作られはしても量が過ぎれば薬は毒へ転じる。毒はなのはの精神を——彼女の強い心を確実に溶かし始めていた。



「…うおおおおおお…ミミガシシシ…うーうーうー…来のいおおおお…うおおお…」



「ほら、なのは、こっちへ来い」「ほ、はい!」「ほう、君もこの魔法を使ってみただね、どうだい?感想は」

「最高ですね、最初は調教にでこすっていただけなんですが、肉棒を付けて

からは、自分から求めてくるようになります」

「それは、良かった。ところで、早速で悪いのだが…一杯もらえんかね?」

「もちろんです。今日はその為にお呼びしたので、すから」



「はう……あつ、ああつ……あつ！」

「おい、なのは、お客様を待たせるな、さつさと射精さないか」

「は、はい……でも、機械じゃ上手く……、イけなくて……ひやうあつ！」

「ゆっくりでいいよ。代わりに少し、僕も楽しませてくれないか？」



「あ、あああつ！ 指、太いのが……入って……くる……あつああつ！」

「ヴァキナの感度も愛液の量も良い、君、指だけでなくこの先も……」

「挿入は駄目ですよ」「ふーむ、悔しい、口惜しいっ！」

「あつああつ、激しくしちやつ！ あつあああつ」







「急激な変化とは言え、約一年分の変化を経験させるのですから
それなりに時間はかかります。一週間から十日程、朝昼夕に三回
今みたいな事をやりますので……」
「うっうっうっ……そんな」

「これがかの聖王の肢体…、スカリエッツィは迷惑な男だったが、
良い仕事を残してくれた」「要望通り、薬は打つてあります」
「結構、彼女とは長い付き合いになる。嫌われたくないのでね」

「やっやあっやだっ！やだあっ！…ふえ？…あっああっ！」

「ヴィヴィオは拒絶の声を上げていたが、男が挿入を試みるとその声が
一気に艶めいたモノに変わった。」

「あっあうっ！ああっああっ！あっあっ！」

男はヴィヴィオの買主だった。この組織では調教段階から買主を
関わらせざる事、奴隷との間により深い結びつきを作り、単に従順な
奴隷以上の付加価値を持たせる事に成功している。

「大丈夫かい？ヴィヴィオ君は最初、嫌がっていたようだが……」
「ええ、大丈夫です。この年は様々な感情が混同しやすいんです。
快楽と愛情とか……、大人でも勘違いしやすい。彼女はあなたの事が
大好きになりますよ」







「やっやだっやだっ！それ入れたら変になるから嫌なのっ！」
「おちんちんって言うんだと教えたただろうっ？大丈夫、いつも通り
すぐに気持ちよくしてあげよう」
「ダメッ……！あ……あああああっ！ やっあああっ」

「やっはあっ！あっああっんあっ！……あああっ！」
「どうだいヴィヴィオ君、おちんちんは気持ちいいだろう？」「
うん、気持ちいい、気持ち良いです。もつと……あうっああっ」

「ふふ、入れる前もこれくらい素直なら不満もないのだがね……今日は
しっかり教え込んであげよう」
「ふあっあっはっはいつ……んんっお願いっ……しまったっ！ああっ！」





「やっああっああああっ！ 凄すぎっやっあ・あ・あ・あ・ああっ！」
「君には一度限界まで快楽を味わってもらおうよ。じっくり
調教というのは私の趣味に合わなかったしね」
「ふあっああっああああっ！ ダメツ駄目駄目目っ！ あああっ」



「いいいいいよっ！おちんちん気持ち良いよおっ！ふあああっ」
「ふふ、良い仕上がり具合だ。君は誰のモノだい？」
「ヴィヴィオもヴィヴィオの赤ちゃんもおじさんのモノですよっ！
これからもうっぱい…いっぱいおちんちんくださいいっ！」
「良い子だっ！今日は僕が枯れるまで精液をあげようっ！」